

論 文

# 『みめより草紙』と「瑞雲」の比較研究

—— 醜女変身の物語について ——

周 新 慧

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Comparative study of “Mimeyori zoshi” and “Ruiyun” : With a Focus on protagonist’s bizarre incident of going through physical transformation

Zhou Xinhui

**Abstract:** “Liaozhany Zhiyi” is a short story collection by Pu Shongling (1640-1715) in The Qing Dynasty. This book spread to Japan during the Edo Period and adapted by Yomihon writers. “Mimeyori zoshi”, was published between 1843 and 1848. It depicts common people’s life and interpersonal relationships of the Edo era. In the epilogue Ryutei Senka describes the protagonist’s in the original play. He also had mentioned that his plots derived from “Ruiyun”. More than simply borrowing content from “Liaozhany Zhiyi” in “Mimeyori zoshi”, Senka also wove in cultural elements from traditional Japanese literature, giving the work a new life that is a sense of reality and local elements tand for Edo’s readers. In this article, I will discuss Ryutei Senka’s Yomihon “Mimeyori zoshi”. Parts of plots are adapted from “Ruiyun” of “Liaozhany Zhiyi”. I will explore the relations between the two works, their characteristics and value in order to examine a facet of the influence by “Liaozhany Zhiyi” on the Edo literature. Through these two works, we not only perceive the ways Senka adapted “Liaozhany Zhiyi”, but also gain a view of the cultural interchange between China and Japan in the Edo Period.

**Key word:** “Liaozhany Zhiyi”, Chinese literature, “Mimeyori zoshi”, Edo Period, adapted

## 1. はじめに

初代笠亭仙果（一八〇四～一八六八）は、幕末の国学者であり戯作者でもあった。江戸時代の戯作者たちは中国種の運用に興味が深いと言われているように、仙果も中国の素材に相当な関心を示している。人情本『清談常磐色香』及び合巻『みめより草紙』は『笠翁十種曲』の『奈何天伝奇』に発想を

求めている<sup>1</sup>。仙果は李漁の小説『十二楼』を粉本として、『セツ組入子枕』（嘉永三年一安政元年）を翻案した<sup>2</sup>。また、嘉永三年から『水滸伝』の翻案である曲亭馬琴の『傾城水滸伝』を『女水滸伝』に改題し、創作し続けた<sup>3</sup>。

『みめより草紙』は天保十三年に初編が出版され<sup>4</sup>、弘化四年に二編と初編を合わせて合巻として刊行された<sup>5</sup>。序文に「しばぬがより はな にんじやうほん おもむき 戯場係を離れ人情本の趣にも非ず、あら ごくや ぼ すぢだて むかしぼなし 極野夫の脚色は昔話たね たうどにありさうな種は唐土の正本、こ 皇朝に譯すもうつらと古くよつほど智慧が奈何天、おとこれ 彼は醜男 此は又お亀女郎の万年紙聞書と御披露びろうせし外題げだいを改たるみめより草紙これ此から承文<sup>6</sup>と記したように、『奈何天伝奇』との関連を示している。蕭涵珍氏も『清談常磐色香』、『みめより草紙』と李漁の作品の關係に焦点を当て、両作の粗筋と作品に用いた中国の典故を紹介した<sup>7</sup>。鈴木重三氏は『みめより草紙』二編の終わりの部分に「又杭州またこうしうの名代なだい傾城瑞雲けいせいすいうんと名乗る者、仙人せんじんの恵めぐみにて一度汚ひとたびきたな顔かほになり悪者わるものの辱はづかしめのを逃のがれて、再ふたび美人びじんとなり。思おもふ男をとこに添そひと遂れうげしと聊齋志異れうさいしゆにも記したり」のように、「瑞雲」を記す段落があると、仙果が『聊齋志異』に影響を受けた事実を指摘した<sup>8</sup>。

しかし、『みめより草紙』と『聊齋志異』の「瑞雲」の具体的な関連を論じる研究は、管見においては見当たらない。そこで本稿では、『みめより草紙』において『聊齋志異』受容の在り方について検討を加えたい。第一は、両作の人物像の類似点について分析する。次に、プロットの似ている部分を取り上げ、最後は両作の趣向についても考察する。『みめより草紙』が『奈何天伝奇』の変身の種を参考した以外に、「瑞雲」から求めた発想を検討してみたい。

## 2. 人物像について「美」と「醜」の比較

仙果が発想の拠所とした『奈何天伝奇』は李漁の劇曲であり、順治九年（一六五二）に出版され、後にほかの単行本と合わせて『笠翁十種曲』となった<sup>9</sup>。話の主人公は闕素封という醜悪で愚鈍な男である。闕素封の顔を見たことがなく、騙されて嫁にきた鄒氏は彼を嫌い、家にある書齋を「奈何天」と改名し、そこで出家、念仏している。闕素封は鄒氏を留めず、自分の代わりにほかの人にお見合いをさせ、美人何氏と結婚した。騙された何氏は嫁にきた後、闕素封が醜いため、鄒氏と同じ「奈何天」に入るようになった。三回目、袁進士の妾吳氏を買い取ったが、吳氏も禪室に入って闕素封と別居し

た。

醜い男闕素封は辺地に食糧を贈り、貧乏人の貸付証文を燃やし、その高い功德によって、神様を感動させ、神様は修正使者を派遣し、闕素封を美男に変身させる。また、皇帝によって彼は「尚義君」に封じられる。そして結末は、三人の女ともに闕素封と仲良くなった。『奈何天伝奇』は闕素封の話を通して教化する意図が明確な作品である。

『みめより草紙』の女の主人公阿光は「た諭かたへん方なも無みくいとへみ醜にくき女にて、い痘あの跡と隙か間な無なく赤あ禿か引はつりて眉ま薄ゆく髪か悴みけ、目め口のくちつけひばも人ひととは違ちがひ、お恐そろしげなる女ななり」のような醜い女から、「き今ふ来たし二に人も阿光あと聞きき、一い礼れい述じゆべて顔かほを見みれば、更さらに昔むかしの阿光あならす、冬ふゆ田たの穠のりの冷ひややかならぬ髪かみは柳やなぎのいとふさかやに梅うめの香かほりを新あらたに散ちらし、眉まゆの辺あたりに引ひきつりし雲くもの峰みねめく物ものは消きえて秋あきの波なみ清きよらに湛たえ、顔かほの麗うるはしさ形かたちのしなやか、桜さくらの盛さかりを玉たま垂たれの隙ひまより眺ながむる心こゝろ地ちして、牡丹ぼたんの花はなの高かう欄らんに添そひて咲さけるが如ごとくなり。う薄すく化粧けい粧ざいて大お人もしき模も様やうを付つけ衣えを着きて、笑わらみ溢あれたる面おも差さしの愛あい嬌きやう類るいふべくも無なし」という絶世けつの美人めい人にになった。そのあと、男おとこの主人しゆじん公こうの友人ゆうじんは「そ闕けつ素そ封ふうとか呼よぶ金かね持もち、顔かほは痘いもの痕あとにて埋うづまり、鼻はなは赤あかくて腐くさり爛たぐれ、背せは猫ねこ背こにて片かた方への足あしも短みじく、心こゝろさへ愚おろかに鈍にぶき片かた端はなるが、世よの大お功德とくどくを施ほどこしければ天津あま神かみ見みおなはして、変へん形ぎやう使し者しやと言いふ神かみを天あま降くだして、闕素封けつそふうを雅みやびやかになる優あ男らと作つくり変かへさせ給たまひし事こと、唐から国くにの歌か舞ぶ伎ぎに作つくり奈何天いあらと言いふ非あらずや」と言い、闕素封けつそふうの物語ものがたりで阿光あが変身へんしんする原因げんいんを説明せつめいする。よって、『みめより草紙』の主人公しゆじんが「醜みにく」から「美うつくし」へ変身へんしんする設定ていせつは『奈何天伝奇』から発想はつさうを仮かりしたものである。

しかし、阿光の人物像は闕素封のほかに『聊齋志異』の「瑞雲」に似ている部分もある。

このことを確認するためには、まず「瑞雲」の内容を紹介する。

杭州一の名妓であった瑞雲は容色といい、芸といい素晴らしかった。賀という書生は、瑞雲と恋し合った。しかし、瑞雲は遊郭の主人に良い旦那を見つけよと言われている。遊郭の主人が勝手に縁談を考えていた頃、ある男が一本の指で瑞雲の額をつつき、「惜しいな」と言って、去って行った。額には指の跡が付いていて、墨のように真っ黒になり、それがだんだんと広がっていき、客は激減し、瑞雲は妓女としては生きていけなくなった。賀はそれを聞いて、可哀想に思った。賀は彼女を身受けしたいと言い、田

畑を売ってまで金をつくり、嫁に迎えた。一年あまりして、賀が蘇州にいたら、同じ旅籠の和生が瑞雲の顔を醜くした人であると知った。和生は賀と一緒に帰り、瑞雲の容貌を元に戻した。夫婦は抱き合って喜び、和生にお礼を言おうとしたら、影も形もなかった。

『みめより草紙』の梗概は「李漁與江戸文芸：論笠亭仙果的『清談常馨色香』及『美目与利草紙』」に紹介されているが、「瑞雲」との関係を明確にするために、より簡単な梗概を改めて述べよう。

京都に藤並一角という疱瘡の葉を売る医者があり、娘阿光は疱瘡のために顔が汚くなった。一角は営業に影響があるのを恐れて、阿光を故郷に送った。一角の妻は田舎にいる娘を心配するあまり、鬱で亡くなった。すると、一角は成人した阿光を京都に取り戻した。しかし、一角の後妻阿横と阿横の娘阿文は阿光と仲が良くない。阿文の恋人は尾張の斯波犬四郎という人であり、読書のために上京したが、遊郭に夢中になっている。犬四郎の友人、水橋鴻太郎は彼と異なり、行いの正しい人である。鴻太郎は阿文と出会い、一目惚れして一角に縁談を申し入れた。阿文と犬四郎は謀って阿文の代わりに阿光を鴻太郎に嫁がせた。鴻太郎は最初、阿光に不満があったが、一緒に生活しているうちに、彼女が賢妻であると認識して婚姻を認めた。神様は二人に感動し、阿光を美人に変えた。一方、阿文と犬四郎は駆け落ちした。阿文はある夜おかしい婆を夢に見たあと、重病になって容貌を失った。犬四郎は阿文を捨てて、逃げる途中、さんざんな目に会った。そこで、反省した犬四郎は鴻太郎の協力を得て阿文と結婚した。

「瑞雲」において、主人公瑞雲に対する紹介は「瑞雲、功之名妓、色藝無雙ずめうん かうしう きりやう なら（瑞雲は杭州の名妓で、色といひ藝といひ、雙ぶものは無かつた）<sup>10</sup>」と記されている。美貌と才能両方とも優れているが、作品において容貌に関する描写はなく、詩を創作できる才能の方に重点がおかれている。瑞雲はきれいな容貌を失ったが、彼女の才能に憧れている男の主人公賀生は彼女を娶る。

『みめより草紙』の主人公阿光は「顔こそ化け物の如くに悪くなりけれど、心さま様いと優しく、誰やさ教えねど文たれをし良く書き物もん知る、人の話よをも一度聞かきては忘ものしるゝ事はなし無く」とあるように、醜いが内在のある女である。男の主人公水橋鴻太郎は最初、阿光の姉、美人阿文に見惚れているが、間違ったて阿光と結た婚したあと、阿光が賢女たびきわすので、いい嫁をもらったと思うようになった。両作の女の主人公瑞雲と阿光は、美貌より内在で男性の認定をもらえる女性として設

定されている。

瑞雲と阿光が似ているところはもう一つ上げられる。それは、男性の主人公と結婚する前に生活が苦難に満ちていることである。瑞雲は名妓であり、賀生と恋し合うが、妓楼の主人蔡媼によって押し付けられてほかの人と縁談がもち上がる。さらに、きれいな容貌を失った後、客もなくなったので「媼斥去妝飾、使與婢輩伍。瑞雲又荏弱、不任驅使、日益憔悴（媼さんは妝飾を斥去て婢と伍にした。瑞雲は荏弱な質で、驅使ひに任へなかつたから、日益しに憔悴へるのであつた）」のように虐げられている。

一方、阿光も辛抱強く日々を送っている。阿光の父藤並一角は京洛五條通にて「疱瘡せぬ妙薬」を売る医師であるが、阿光は七歳のとき「いと〜重き疱瘡に掛かりて命は繋ぎしが、二目とも見られぬほどの汚き顔に変はり」と、疱瘡のために顔が汚くなった。一角は人によって偽りの薬を売る疑いを心配するから、阿光を密かに故郷の藤浪の里にいる親類のところへ送った。しかし、「此親類の某は貧しく暮らし、心さへ拗げ者なれば、阿光を少しも勞らず」ので、阿光が田舎において苦しんでいるうちに、十三四歳になった。阿光の母は薬を売



図1 前編11裏

り広めるために娘を捨てた一角に不満を抱き、阿光を取り戻すことを進めるが、一角に聞き入れられることなく、ついに「病を引き出し、半月余り患ひて今は死ぬ」と、病気で亡くなった。妻が亡くなったことに衝撃を受けた一角は阿光を都へ引き取った。半年の後、ひとり寂しい一角は阿横という後妻を娶った。阿光は阿横と彼女の娘阿文によって虐げられている。

阿光が藤浪にいるときの世話人阿直が水橋鴻太郎に「長の間阿光様をお預かりなされしが、さてもむごな酷い為さりやう斯様〜と語り出で、其より阿横の阿文を連れて後添ひに入し事、阿光を苦しめたりしよし、其を恨みず逆はらずかう〜を尽くせし事、年頃の艱難辛苦今こそ鴻太郎情け深く」と言ったように、鴻太郎と出会う前の阿光は、不幸な人であった。阿光と瑞雲二人とも、男の主人公が現れる前、徳才があっても美人ではないため、認めてくれ

る人がいなくて、苦しい状況に陥っている。それは世の中の人々が美貌を愛し、徳才を無視する愚かさを風刺する仙果と蒲松齡の創作意図が同様であると言われる。また、彼女たちの内在の美しさを認め、常ならぬ男の主人公を引き出す効果もある。

男の主人公の方について、「瑞雲」の賀生と『みめより草紙』の水橋鴻太郎も似ている設定は少なくない。まず、二人とも優れている人物である。「瑞雲」では賀生を「餘杭賀生、才名夙著（餘杭に賀といふ書生があつて、才子の名が夙から著つてゐた）」と記し、簡単に才のある者と紹介する。『みめより草紙』の方には「水橋鴻太郎と呼ぶ者也。犬四郎とは事変はり、色白く背高く清らなる、生まれながら言葉少なく立ち振る舞ひ実貞にて、重々しく行ひ正しき者なれば」と、鴻太郎を顔立ちと人柄両方とも優秀な人物に設定している。

優れた人物である賀生と鴻太郎は、苦境にいる女の主人公を哀れみ、見捨てることがない。「瑞雲」において賀生は瑞雲が名妓である時に彼女と恋し合い、瑞雲が美貌を失った後、「賀聞而過之、見蓬首廚下、醜狀類鬼。起首見生、面壁自隱。賀憐之、便與媪言、願贖作婦（賀はそれを聞いて過つてみると、蓬首で厨下に居る姿は、鬼の様に醜くかつた。そして首を挙げて賀を見ると壁の方を面て顔を隠した。賀は憐れに思つて媪さんに贖をしたいと言つた）と、苦境に陥る瑞雲に同情し、すべての財産を払って瑞雲を救った。

鴻太郎が最初、見惚れたのは阿光の姉、美人の阿文である。阿文と彼女の恋人斯波犬四郎の作業で騙されて阿光を娶った。しかし、阿光の運命に翻弄された不憫な経歴を聞いた後、「鴻太郎はつく／＼と一件聞きては驚き二件聞きては嘆き三件聞きては涙を浮かめ」と阿光を哀れみ、彼女を戻すことができなくなった。一緒にいるうちに「此の阿光



図2 前編下 8裏9表

かほ きたな けうと た む ふ ま やさ しなたか おとな こと  
 顔こそ汚く気疎けれ、立ち居振る舞ひ優しくて、品高く大人しく、人の言  
 ば しん せ そ ととき いちろ おなほ い まこと  
 葉は信ぜられねど、其は時により色にもしるし、阿直の言ふのが実ならば、  
 あ けんぢよ これあやま こうみやう き みづか さやう ねが  
 又有るまじき賢女にて此誤ちの功名か人にも聞かせ、自らも左様に願ひし  
 ごろ のぞ こい かな いもの  
 日頃の望み此処に叶ふと言ふ物ならんか」と、阿光の遭遇に同情し、遂に阿  
 光を恋するようになった。

両作において、男の主人公は美貌より女の内在を重視する点で一致している。作者は色好みという世間の現実と対比し、常ならぬ主人公の人物像を描き出し、顔立ちより心を重視すべきという教化する意図を表している。

「瑞雲」は主人公瑞雲と賀生だけに焦点を当てて人物関係が単純な物語である。「美」と「醜」の比較は、瑞雲が美貌のある時と美貌を失った後のことである。瑞雲は名妓の時、美しい顔を持っているが、蔡媼によって抑えつけられていて、実は不幸な人であった。顔が汚くなった後、かえって賀生と夫婦になって幸せになれた。賀生にとって瑞雲の「美」は顔だけではなく、才能があるという本質の「美」でもある。女が美しい顔を持っていることが「美」という世の中の認識と異なり、本質の「美」こそが美しいことであり、「美」と「醜」を新たに定義することが作者の意図だと思われる。ここには本質の「美」があれば、男に愛されて幸せが手に入る意図も含まれている。

『みめより草紙』も同様に、醜い女阿光が鴻太郎の認可をもらったことで、本当の「美」は美貌ではなく、賢いということが本質の「美」であるという観点を提唱している。「瑞雲」の単純な人物関係に比べ、『みめより草紙』は複雑に錯綜した筋を持っている。「美」と「醜」の比較は阿光の顔と内在のみならず、「美」の光が輝いている主人公阿光と鴻太郎のほか、対照のために「醜」の悪役も登場させている。阿光の対立人物として描かれているのは、顔が美しいが心根の悪い阿文である。鴻太郎の対立人物は阿文の恋人斯波犬四郎である。犬四郎に対する描写は以下のようなものである。

こゝろ はりのくにあまべのこほりながしむら こをきな よ こと 十  
 此処は尾張国海部郡某村の人の子にて、幼きより本読む事の好きなり  
 ければ 体は弱し、商ひは嫌ひさうなる、生まれ付き一層字者にでもなれ  
 とて、物字びの爲上京させしが、彼の楽しんで淫せずの教へを己御方にし  
 て、始終に女あり。顔の偶一事も事となり、たはやかに良き女は川の  
 ひがし ありはらのなりひら わ おもかげ誰 なびや なぎばん ぼ きしゆくやと ちろう  
 東に、有原業平めいたる我が面影誰でも靡く。柳馬場の寄宿屋戸は女郎  
 や どうせむすめ ひきこ げいこ つひ せやくおんおほ しょう  
 屋、同然娘を引き込む芸子が来る。遂には借金大きになり。師匠には破

門され、親には勘当受けて後、国に帰るに家もなし。物怪の幸ひ京者になるこそ良かれと勧められ友達の情けにて、此の空き家を近頃借り受け、扇、団扇の絵等描き、或ひは俳諧狂歌の点に飢ゑを凌ぐ憂き身ながら、都にも多かるまじき男ぶりにて愛敬あり。田舎生まれも言葉さへ不束ならず。所に慣れて辺りの女に思はれて不意の幸ひ、又多うか〜月日を送りける名を斯波犬四郎と名乗りけり。云爾故は唐倭の文章も拙からず遊芸は何でも御座れ、然れば苗字も斯波なれば日本の司馬相如かの長卿が生まれ変はりとも自ら誇りて相如が幼名犬子といふのを取りたるなりとぞ。

犬四郎は、自分を司馬相如であるかのように誇り、女のために墮落し、生活が乱れている者である。阿文と犬四郎が悪事をした後、阿文は怪しい姥を夢に見て、それから痲病になってきれいな容貌を失った。犬四郎は病になった阿文を見捨てたあとも、事故で九死に一生を得た。それで阿文と犬四郎はようやく自分が犯した罪を認識した。一方、阿光と鴻太郎は徳を持っているために、神を感動させ、阿光を美人に変えさせた。『みめより草紙』において、阿光の顔と内在以外に、人物を添加することによって、阿光と阿文、鴻太郎と犬四郎の比較で人柄の「美」と「醜」の比較を果たした。

以上のように、「瑞雲」と『みめより草紙』は、愛情物語の大筋と主要な趣向において共通するものがある。しかし、仙果は脇筋を加えたことによって、鴻太郎の台詞に「内方と言ひ此の阿文ともに形の変はりし事、実に不思議と言ふべきが、一つは神罰一つは御利益」と書いたように、人柄の「美」を持つべきと勧善懲悪の思想を提唱している。

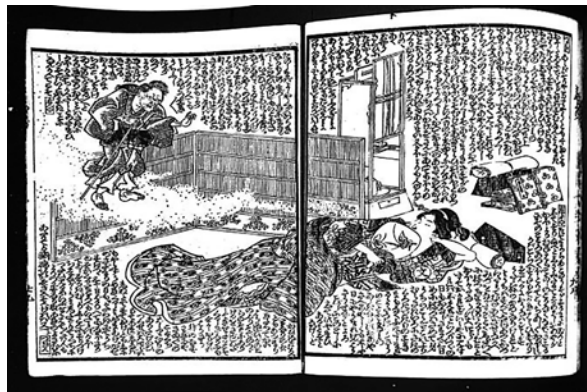


図3 二編下 9裏10表

益」と書いたように、人柄の「美」を持つべきと勧善懲悪の思想を提唱している。



### 3. 仙人の出現と醜女変身

優秀な男の主人公は顔が醜いけれども、内在が美しい女の主人公と縁を結ぶということが、両作の趣向であると言うこともできよう。そのほか、両者には内容構成上に同趣向なものを見出すこともできる。そこで双方の行文を対照させておこう。

第一は、女の主人公が夫をほかの女に譲りたい部分。

「瑞雲」においては「入門、牽衣攬涕、且不敢以伉儷自居、願備妾媵、以俟来者（門を入ると瑞雲は賀の衣を牽いて涕を攬し、自分では伉儷にならうとは思はない、願妾媵にしてくれといつて、正妻の来るを俟つのであつた）」と、瑞雲が賀生と一緒に帰り、賀生の妾になりたく、本妻の座をほかの女に譲りたい一節がある。しかし、賀生は「人生所重者知己、卿盛時猶能知我、我豈以衰故忘卿哉（人生で重にすべきは、己れを知ってくれた人である。卿は全盛な時で猶も、能く我を知ってくれる人だ。我は衰へた故といつて卿を忘れるやうなものでは豈）」と言ひ、瑞雲を裏切らない。その後、「遂不復娶。聞者共姍笑之、而生情益篤（遂う復と娶らないのを、聞き知つた人たちは共な姍笑つたのであるが、賀の情は少しも変らず、益々篤くなつたのである）」と、ほかの女を娶ることなく、他人に笑われても瑞雲への愛は変わっていない。蒲松齡はこの話によって一意専心の愛を描き、後に仙人が現われる伏線を設けている。

『みめより草紙』において、阿光は鴻太郎と結婚した後、鴻太郎は「友達にも蔑まれなば恥辱の第一心を定めて、此女貞順節義の人に仕立て此度の非を贖はん。教へ甲斐無き痴れ者なりとも不仕合はせは見捨てられじと、胸を定めて間違ひの由は色にも決して出ださず」と、他人の視線に気にせず、阿光と一緒にいることを決意した。しかし、醜い阿光には、自分はすばらしい鴻太郎とつり合いが取れず、美しくて優しい妾を置きたいという気持ちがある。仙果は以下のように阿光の思いを表す一段落を書いた。

我が醜くてゆくりなき、幸ひあるをいよいよ喜び、いよ〜其の身を慎んで、又つく〜と思ひやう、我が夫は世の常ならぬ物知りにて、志も人並みの人とは違へど、老い朽ちたる年には非らず、花鳥をも余所にする僻者にてもあらばこそ、色ある女を憎みもせめ。身の行ひの正しき故、仮にも遊女舞姫に戯れ給ひし噂も聞かず、増して腰元婢女など親しくさへし給はず。此全く淫らなる欲念を抑へ給ふにて、艱難辛苦に身を苦しめ立て堅き操を守り。妻に代はり家を修め人を助けし、手柄も無く芸能も風流

も知らぬ拙き妾をしも、月にも花にも返しやうに思し召すこそ苦しけれ、  
 顔美しくて心立て優しき女もなからでやは妾を一人置き給へ、我が手助  
 けにも為まほし。

それに対し、行いが正しい鴻太郎は「此よりをりへ勸れども、鴻太郎笑ひて答へず」と、妾を置くつもりがない。そのうち、阿光は偶然に、藤浪にいる時の友達、阿花と出会った。この阿花は「名の如くいと美しく生まれ立ち年も我と同じほど也。心素直に柔らか



図4 二編下 7裏8表

く事に賢き女也」と、美しくて賢い女である。阿花は名古屋の富裕な家に奉公しているが、その家に不満を抱いているため、阿光の家に奉公したいと意欲を言い出した。それを聞いて「阿光心に此女もしも妾をいとはずは此に上越す女もあらじと然々と思ふ」と、阿光は阿花を鴻太郎の妾にさせるつもりであることを阿花に言った。阿花も「幼き時よりあの君は見知り越しにて、物こそ言はね及ばぬ。之だ諦めても心は花は今も散らず、日頃の願ひに候ひき御添臥は恐れ多し、唯御床の上げ下ろし然ばかり許させ給へ」と、鴻太郎に対する敬慕の思いを表して妾になることを認めた。しかし、鴻太郎は「物から事に託け、未だ枕は親しくせず」と、阿花と親しまなかった。

上文から『みめより草紙』において、醜女である女の主人公は、夫のためにほかの女を娶りたいが、男の主人公は一途に女の主人公を愛する内容が、「瑞雲」と類似していることがわかる。両作ともに、嫉妬しないという古代の「女徳」と、男が美貌に惑わず品質を褒めている点に作者の意図が窺える。この部分も後文の仙人を感動させる前書きである。

第二は、仙人が醜女を美人に変身させる件り。

男女の主人公が互いに愛し、他人が足を踏み入れられない筋が似ている以外に、両作は、夫婦になった主人公たちが仙人を感動させ、仙人によって醜

女を美人に変身させる一部も類似している。

前述のように、「瑞雲」において瑞雲が和生によって顔を汚された一節がある。和は「睦まじい」の意味を取っている<sup>11</sup>。和生は賀生と出会って、「昔曾一觀其芳儀、甚惜其絶世之姿、而流落不偶、故以小術晦其光而保其璞、留待憐才者之眞鑑耳（昔曾一度、其の芳しい儀を觀たんです。世に絶れた姿を持ちながら流落不偶いのを甚く惜しいと思つたので、術で一時光りを晦まし、璞を保存して置いて、才を憐れむ者の眞鑑を待たうと思つた譯なんです）」と、瑞雲を醜くする理由を、瑞雲の才能を憐れむ人を鑑定するためと賀生に言った。賀生が瑞雲の夫である身分を示したあと、和生は「天下惟眞才人爲能多情、不以妍媸易念也。請從君歸、便贈一佳人（天下で唯眞の才人が多情でありうるのです。妍しいとか媸しいとかによつて念を易へないんです。請、君に従て歸ませう。便て一佳人を贈りませう）」と言ひ、賀生が情の深く、移らない人であり、顔立ちが悪くとも美しくとも瑞雲への愛は変わらないから、瑞雲の容顔を元通りにすると約束した。

瑞雲の顔を汚すことは、瑞雲を手に入りたい人への試練とも言えよう。本心で彼女を愛する人だけが和生の認可を得られ、瑞雲を美人に戻されるということである。一方、『みめより草紙』も仙人によって女の主人公を醜女から美人に変身させる一節がある。変身させる理由は二つあり、一つ目は鴻太郎の徳行が高いからである。

阿光が美人になった最初、鴻太郎は妖精の術だと思ひ納得できない。犬四郎が「眞の道に寄る人の千万人に一人だに得難き今の世に抜きんで、御身達の徳行の類ひ無きを神明の等閑ならず。賞美あつて掛かる不思議を人に見せ、輕薄者の戒めとせさせ給ふと我は思へり」と言ひ、阿光が美人になった理由は鴻太郎の高い徳行に仙人が褒美を与えることで、輕薄な人の戒めとすることに帰因する。

二つ目は、阿光も仙人を感動させる行動がある。阿光と鴻太郎が都から鴻太郎の故郷に帰る途中、楊貴妃の祠を経由した。楊貴妃の遭遇を聞いた阿光は「昔も今も此処も彼処も根無し事こそ多く候されど、彼の楊貴妃は並ぶ勝たなき容貌にて、寵愛深きが仇となり。非業に命を落としたる偽りならねば不憫にも哀れにも候はずや」と、美貌のために運命に翻弄された楊貴妃に同情し、「人の心を乱すといへとも女は顔の良きに定まり、其をめでらるるが世の慣ひと思はず、嘆くも我が醜きを心に甚く恥づるなるべし。実や人の

かりそめ つく まう ほこら  
 仮初に作り儲けし 祠  
 なりとも祭れば御霊の  
 備はんとか楊貴妃 妾  
 が 醜きを哀れみ給へ  
 と心に念じ、いと懇ろ  
 に伏し拝む」と、「三千  
 人の妃の内にも並ぶ  
 勝たなき美人」とい  
 う傾国の容貌を持っ  
 ている楊貴妃の祠を  
 拝み、



図5 二編下 5裏6表

きれいになりたいこ  
 とを楊貴妃に願った。  
 そのあと、藤浪に帰  
 った阿光は小野小町  
 の墓を見つけた。「小  
 町は余りに色深く、  
 多くの人の思ひ焦が  
 せし、其の罪自然と  
 身に報ひ、後は怪し  
 き袖乞ひと落ちぶれ  
 果てしと言ひ伝ふ」  
 と、小町は楊貴妃と  
 同じく美しい顔のため、  
 運命が悲惨になった女



図6 二編下 6裏7表

である。しかし、阿光は「容貌良き女に限り仕合はせ、悪き者のならん縦しや、行末衰へても一度左様の如き顔にもならまほしかかと、年若ければ顔良き女をいとせめて羨ましく思ひ込み、手ははらへと袖に、雲無き雨を催し空に、知られぬ花の雪風に散るさへ哀れなり」と、美人になりたいことを小野小町に願った。そこで、彼女を美人に変身させる阿花が登場した。

『みめより草紙』の人物紹介のページに、仙果が阿花を楊貴妃と小野小町の像と一緒に描き、阿花が楊貴妃と小野小町の化身であることを暗示している。阿光が楊貴妃と小野小町の墓を拝み、どうしても美人になりたいという気持ちを伝え、それに感動した仙人は化身である阿花を派遣し、阿光の願いをか

なえさせたと考えられる。「瑞雲」において瑞雲が美人に戻る原因は賀生の深い情であるが、『みめより草紙』の方は鴻太郎の徳行と阿光の敬虔さに取り替える。この敬虔さも作者が作品によって宣伝したい主人公の優れた資質である。そのような資質があるからこそ、

仙人が出現して褒美を与えるという勧善の意図が窺える。

第三は、仙人が術を施したあと消えた一場。

両者のこの部分を以下のように比較してみよう。

令以盥器貯水、戟指而書之、曰濯之當愈。然須親出一謝醫人也。賀笑捧而去、立俟瑞雲自饋之、隨手光潔、豔麗一如當年。

盥に水を貯れさせ、指を戟にして字を書いて曰ふのであつた、これで濯へば愈りますからね、そしてたら親で出て来て、醫してくれた人に一偏謝を云はなければいけません。賀は笑つて盥を捧げて去つた。そして立つて瑞雲が自分で饋ふのを俟つて居た。見て居ると、手に随つて光潔になり、豔麗さが一く當年の如になつた。

阿花が始め奉公せし家にて密かに賜りしと、いと大切に秘め置ける洗粉様の怪しき薬四五日前より阿光に与へ、朝毎に磨かせしが二日三日と用ふるまゝに、面などを脱ぎし如く顔が変は



図7 前編上 2裏3表



図8 二編下 10裏11表

れば、髪かみも伸のび肌はだへこま細いろつやよかに色艶いろつやよ良く、心こころは爽さわやぎ身みは健すこやかかげに、世よの中なかは  
 広ひろき物もの妙まがく薬くすりも又またあればあり。

「瑞雲」においては、瑞雲は和生が与えた護符のある水で顔を洗ってから元の容貌に戻った。『みめより草紙』においては、阿光も阿花が与えた薬で洗ってから美人になった。両作は同じく仙人からもらった霊薬で顔を洗うことで、きれいになる場面がある。

また、和生は瑞雲を美人に戻したあと、「夫婦共徳之、同出展謝、而客已渺、徧覓之不可得、意殆其仙歟（夫婦は共に徳ありがた之いつしよがり、同れいに出のて謝を展べようとすると、客は已もう渺みえなかつた。徧さがしまは覓たぶんつたが見つからないので、殆おも仙人だらうと意おもふのであつた）」と、瑞雲と賀生がお礼を言おうとしたら、姿を消した。『みめより草紙』において、阿光が美人になったあと、阿花は「人々阿花を尋ねぬるに、いつもの部屋へやにも居をらぬのみか事ことに、此処こゝにて着きせたりし着物きものより帯下紐おびしたひもすべ総まとて纏ひそめて密そかにあり。其さまの様あやいと〜怪ひろしげなり。広いへき家ことへを尽さがく捜かぎせど、影みも見えざりけり」と、和生と同様に何も言わずに消える結末になった。両作ともに、主人公が円満な結末をつける仙人が消えることで、怪談の奇妙な色彩を与えている。

『みめより草紙』の粉本の筋と行文の利用のしかたについていえば、醜女の変身をめぐる愛情物語の構成は、粉本の大枠を導入している。しかし、仙果は粉本の筋や行文を生のかたちで取り込むという安易な翻案方法をいさぎよしとせず、粉本からその枠組となっている大きな構成要素を抽出し、それを自作に導入してゆくという、高次の翻案方法を開発していたのである。

#### 4. 知己と賢妻の違い

『聊齋志異』の中には「連城」、「喬女」といった知己の愛を謳歌する作品が多い。そのため、蒲松齡が知己の愛を高く評価していることが窺える。「瑞雲」も知己の愛を趣とした一則である。瑞雲と賀生の感情は常に見られる男女の愛ではなく、純粋な知己の愛というほうがよりふさわしい。瑞雲は全盛のときに、貧乏な賀生に惚れ、賀生も瑞雲が醜女になっても彼女への愛は変わっていない。互いに知己の愛があるので、仙人を感動させ、円満な結末を得る物語となっており、そこから蒲松齡が知己の愛に讃歌する意図がわかる。

一方、仙果が『みめより草紙』で提唱したいことは、女として一番重要な

のは美貌ではなく、徳行であるということである。阿光は優れた徳行があるからこそ、鴻太郎の認可を得て、醜女から美人に変身して、円満な結末を手に入れる。阿光とは逆に、阿文は徳行がないから、きれいな顔を失い、余生は悔しい日々を過ごす結末になった。仙果は『みめより草紙』の序文に「下手なを嫁にと思ふ踊かな。此發句は横井氏也有先生の名吟なり。實論語にも過を観て仁を知る訓話に似て、容貌伎藝は頼むに足らず、徳は本也才は末、万能よりも唯心。彼みめよりとり称ぶ果子も、見掛けによらぬ風味」と書いている。横井也有の俳句「あの下手を嫁にとおもふ踊かな」<sup>12</sup>と『論語・里仁』の「人之過也、各於其党。觀過斯知仁矣（人の過ちや、各のその党に於いてす。過ちを觀れば斯に仁を知る）」<sup>13</sup>の典故を運用し、人の苦手なことから本心を見つけられるという道理を述べ、容貌で女を評価することを批判している。

また、仙果はテーマ『みめより草紙』で「見目より心」という容貌の美しさよりも、心の美しさのほうが大切という趣を表したいのである<sup>14</sup>。女は心の美しさを持つべき、男は心の美しさを重視すべきという教誨を述べている。阿光は徳行が優れた「善」の代表として褒美を与えられ、阿文は徳行がない「悪」の代表として罰を与えられる。『みめより草紙』は二人の女性の善と悪とをあざやかに対比して描き出し、勸善懲悪にうってつけのものであった。従って『みめより草紙』は粉本『奈何天伝奇』と「瑞雲」とは別個に独自の趣向を設けようとしたものであり、それはこの作品の創意の一つと見ることができよう。

## 5. おわりに

本稿では、『聊齋志異』の「瑞雲」と笠亭仙果が著した『みめより草紙』のテキストを比較し、考察を加えた。その結果として、以下のような点を指摘することができる。

人物像について、『みめより草紙』の阿光と鴻太郎は「瑞雲」の瑞雲と賀生に類似するところが存在している。両作とも、醜女として苦境に陥り、男の主人公と結婚したあと、夫を自分以外の美しい女に譲りたい女の主人公と、優れた人物であるが、醜女である女の主人公を見捨てぬ男の主人公の物語である。筋だてについては、主人公たちの行為に感動させられた仙人が現れ、妙薬を水に入れて、それで洗った女の主人公を美人に変身させ、最後に仙人の姿が消える筋立てに関しては、両作はほぼ一致している。

その一方、「瑞雲」と『みめより草紙』との間には、趣向の質的な差異が見出される。前者は知己の愛への謳歌であり、後者は容貌の美しさより、心の美しさのほうが大切ということである。

『みめより草紙』は『奈何天伝奇』と「瑞雲」のほかに、司馬相如、楊貴妃、『論語』といった中国の典故も用いている。ここからは仙果をはじめ江戸時代の文人たちの漢文素養の広さも窺える。その中の『聊齋志異』種の涉獵についてはどのような状況であったのか。江戸時代の『聊齋志異』の受容に関しては、稿を改めて論じたい。

## 注

<sup>1</sup> 蕭涵珍「李漁與江戸文芸：論笠亭仙果の『清談常馨色香』及『美目与利草紙』」（『民俗曲芸』189 二〇一五年九月）129頁

<sup>2</sup> 蕭涵珍「笠亭仙果『七組入子枕』について—季漁作品の影響の一端」（『近世文芸』101 二〇一五年一月）31-32頁

<sup>3</sup> 石川了「初代笠亭仙果年譜稿2」（『大妻女子大学文学紀要』12 一九八〇年三月）7頁

<sup>4</sup> 石川了「初代笠亭仙果年譜稿1」（『大妻女子大学文学紀要』11 一九七九年三月）36頁

<sup>5</sup> 3に同じ。

<sup>6</sup> 笠亭仙果『みめより草紙』（栄久堂 天保十三年から弘化四年）用いた原稿は群馬大学蔵本であり、筆者によって活字された。

<sup>7</sup> 1に同じ。

<sup>8</sup> 鈴木重三「合巻物の題材転機と種彦」（『国文と国文学』一九六一年四号 至文堂）65頁

<sup>9</sup> 李亜力「李漁與翼聖堂、芥子園書坊関係考辨」（『文献』第四期 二〇一〇年一月）59頁

<sup>10</sup> 本稿における『聊齋志異』からの引用は清末知不足齋刊本、一経堂藏板『批點聊齋志異』による。また中國古典文學叢書『聊齋志異：會校會注會評本』第四卷1387-1390頁（上海古籍出版社 二〇一一）も参照した。訳は『完譯聊齋志異』第二卷35-39頁（蒲松齡作、柴田天馬訳 角川文庫 一九五六年十二月十日）による。

<sup>11</sup> 馬瑞芳「瑞雲和恒娘」（『蒲松齡研究』Z 1号 二〇〇〇年十月）95頁

<sup>12</sup> 横井也有『名古屋叢書三編 第十六卷 横井也有全集上』（名古屋市蓬左文庫 一九八〇年三月）101頁

<sup>13</sup> 荻生徂徠 小川環樹訳注『論語徴1 東洋文庫575』（平凡社 一九九四年三月）155-156頁

<sup>14</sup> 校注・訳：中野幸一『うつほ物語②新編日本古典文学全集15』（大日本印刷株式会社 二〇〇一年 五月）165頁